

## 文献案内

池和田有紀「むし双六の和歌」〔『書陵部紀要』七三、宮内庁書陵部、二〇二二年三月〕

宮内庁書陵部所蔵の御歌所本『むし双六の和歌』の資料紹介。和歌を主軸とする異類物お伽草子を書写した冊子と、その物語世界を大判彩色の絵双六としたものが組み合わされている。

物語は他の伝本が知られていないようで、双六のためのオリジナル作品らしい。葉月の半ば、月の美しい晩に、神楽岡の松虫・鈴虫が、雁・きりぎりすの助けで、多くの虫とともに御所に上り、清涼殿にて建保六年の中殿御会を真似て、さまざまな鳴き声をあげ、歌を詠み合う。狸と狐、蛙も歌会に加わる。

双六は七五×九五センチメートル程で、扇・団扇形のマスが四六あり、「清涼殿」マスが上がりである。賽子は附属していないが、マスに記された文字から、御会の題を含む「池・月・久・明・和・歌」の六つと推定される。

次いで、物語を異類物お伽草子と比較して、『玉虫の草子』を下地にしていることや、『虫妹背物語』の虫行列との類似を確認する。一方で、むしろ『虫の歌合』『虫の庭訓』『こほろき物語』の虫たちの詠歌と共通性が強いことが指摘される。享受層には皇族・公家・門跡層が想定されるが、とくに女性の可能性に留意している。寛永年間に『中殿御会図』が九条家から後水尾院へ貸し出されたことで同絵巻が流布し、本作の成立の契機の一つかとも推測している。

『書陵部紀要』は版面のPDFファイルがウェブ公開されており、マスごとの部分図を順に並べた図版は翻刻と対照しやすい。「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」からはカラー画像も公開され、サイズの大きな画像から実寸程度でのプリントも可能である。また紙媒体へ戻さずに、デジタルゲーム化も出来よう。もともと双六には幼学書としての側面があり、古典に親しむ教材としての利活用が期待される。ただし本論文でも示唆されていたように、遊戯の盛り上がりには賭け事としての側面も見逃すことができないか。

(藤原重雄)

福井県立歴史博物館編『ふくいのお伽草子 駕籠を訪ねて』(同館、二〇二二年七月)

福井県内に伝存する駕籠の調査にもとづく特別展の図録。駕籠は近世において代表的な乗用具であり、現在も少なからず伝存しているはずだが、華麗な時絵の施された女乗物を除けば、あまり研究が進んでいない。体感的に愛知県と並んで現存数が多いと指摘されてきた福井県において、本展担当者の有馬香織氏が地道な調査を重ねた成果の披露で、原品十二挺(および山駕籠一挺)が展示され、他に県内の遺品約二十挺が図版で紹介されている。

広義の駕籠は、一本の担ぎ棒から乗用部を吊る乗用具だが、本展での対象は箱型の乗用部を備えた上級のもので、特に区別して乗物とも呼ばれた。女乗物と男乗物とで章を分け、一挺ごとに丁寧な紹介を施している。所蔵者・使用者や来歴・使用法などの基本情報と、造形としてのディスクリプションとが、バランス良く要を得て記述される。乗物の形状からの分類論として現在でも有益な『守貞謾稿』の記載・挿図との照応を補助線に、個々の乗物の類型性と特徴とを提示しており、出品された乗物が分類体系のなかで位置づけられ、相互の関係へも理解が及ぶように工夫されている。さらに絵画作品に描かれた乗物に加え、使用の現場を想起させている。

「総説 福井県所在の乗物を探して」でも課題が示されるように、乗物・駕籠の研究は多分野の専門性を必要とし、充分には進んでいない一方で、所蔵者側では扱いに窮して密やかな消滅の危機にもさらされている。そうした状況下で、県域全体(現存数は嶺北に偏るといふ)を対象に調査を実施し、その価値を普及させる点でも、展示企画の意義は大きい。所蔵者からの「あたたかい応援のお言葉」が実感籠って伝わってくる一冊となっている。

乗物は、担ぎ棒を含めると案外と大きく、撮影場所の確保も難しいが、乗用部の内部も含めて、基礎的な資料の機能を果たしうる写真が整えられているようである。A4判横使いとして、全体写真を収めやすくしてある。全カラー一八八頁。

(藤原重雄)